

IV 東大寺写経所における食器構成の復元

1 器種と器名とのちがい

2つの分類の狭間で II章では正倉院文書所載の食器の名前を整理し、III章では平城宮・京出土土器を、考古学的な分類記載法に即して整理したうえで、それらに対応するとみられる古器名をあててみた。両者を合一し古代の食器構成を再現するためには、古代の器名と、考古学上の器種名との関係を整理しなければならない。ところが何度も述べてきたように、両者はつねに1対1の関係にあるわけではないから、考古学上の器種名を、古代の器名へと読み替える必要がある。その前に、ここまでの検討でどのような齟齬が生じているか、いくつかの事例を示しておこう。

もっとも多い食い違いは、古代における碗・杯・皿の別と、考古学者の認識における碗・杯・皿とが必ずしも整合しないことである (Fig.31)。例えば、古器名における「片碗」や「碗形」は、その字のごとく碗の仲間であるが、考古学的分類のなかでの一大タクソンである「杯(つき)」のなかに包摂されてしまう。「陶碗」が大口径の須恵器杯A・杯Bに、「土片碗」や「土碗形」が土師器杯A Iにあたるのは、まさにその一例である。これとは逆に、古代の杯が、考古学者にとっての碗に含まれる場合もある。例えば奉写一切経所関連文書に頻出している「土窪杯」は、間違いなく土師器碗Aに対応する。

同様に、古代の杯と考古学上の皿との間にも、不整合が生じている。上でみた「土片杯」は、しばしば皿A IIとして記載されるが、これはその一例である。ただし、まったく同じ大きさ(口径×器高)の食器を、考古学者は杯C Iと呼ぶこともある。同じ大きさの食器を、杯とも皿とも呼ぶ一要するにこの不整合は、考古学的分類の階層性の問題でもある。

ここで主張したいのは、土器の実名に対して、考古学上の仮名ともいえる器種名がいかに適切でないか、ではない。そもそも考古学上の器種分類は、古代における実用食器の再現を第一の目標として考案されたわけではないから、古代の分類に合致しないのは当たり前である。したがってこの食い違いは、将来ぜひ解決されるべき問題なのではない。しかし問いたいのは、考古学上の器種名に馴染んでしまうと、古代の土器を食器として、つまり生活用具の一種としてとらえなおそうとすると、無意識的に「ボタンを掛け違

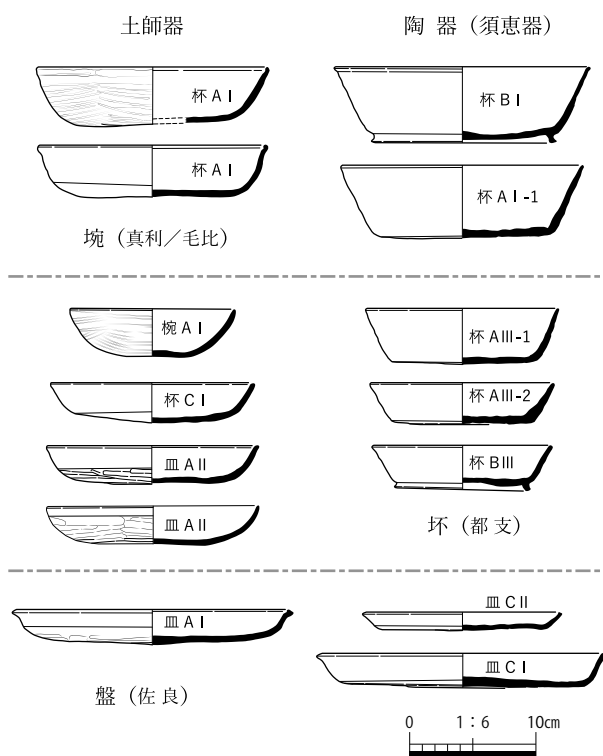


Fig. 31 考古学上の「器種」と古器名との関係

える」ことになるのではないか、ということである。

碗・杯・皿にA・B・C・・・をかけ合わせて、さらにI・II・III・・・と整理してできあがる「言語」が、考古学者の思考法を固定してしまう。換言すれば、それは「ほかの分類法に気づきもしない」という悪弊があるということである。例えば、前章5節では、平城宮土坑SK820の土器群において、土師器の「片坏」はおもに杯C Iからなるが、それだけでなく杯A IIIと呼ばれた器形をも包摂するとした。ひとつの実用器種を標準的な大きさ（口径×器高）で識別しようとする見方は合理的であるし、当然可能である。しかしこの見方に気づいた自らが、いちばん最初に違和感を覚えたのはなぜだろうか？それは「杯Aはやはり杯A」という刷り込みが強すぎて、杯Cとは実用食器の位相において同質であるという見方を、これまで一度もしてこなかったからである。つまりこの違和感は、あくまでも奈文研における・考古第二研究室的な「習慣」に根差したものであって、新たな見立ての合理性とは、何らかかわりがなかったのである。

考古学者は、目の前に同じような大きさと深さの食器が2つあっても、口縁部の細部形態がちがえば、両者は「異なる器種」であるとみなす文化に属している。しかし、本書で問われるのは、大同と小異とのどちらをより重視するか、である。小異を分類の基準とする立場からは、古代の食器はそれぞれ数十種からなるわけだが、正倉院文書に見える古代の器名は、食器にかざればせいぜい数種類である。古代の土器を食器として、生活用具のひとつとして認識しようとするれば、小異を捨てて大同を取るということになる。

以上の葛藤をふまえたうえで、奈良時代における食器構成の復元をおこなおうとするならば、それは古代に実在した文化的コードをなるべく復元し、それにもとづいて考古学的器種を古器名へと翻訳することとはほぼ同義になる。考古学的な器種分類を完全に排して、本書でのみ通用する器名本位の分類を樹立してしまうことも、あるいはできたかもしれない。しかし筆者以外の他者にとっては、やはり不便なことのほうが多いであろう。したがって、古器名と器種という、2つの分類体系の狭間では、両方から参照できるようにしておくしか方法がないのである。

2 器名考証

正倉院文書に見えている食器の器名と、考古学的な器種名との間には、このような不整合が存在していることを正しく認識したうえで、実際の土器に古器名を与えてみよう。本節こそが、本書の核心にあたるのである。以下、土師器と須恵器とに分けて器名考証を試みる。

i 土師器食器

片碗・片坏・片盤 土師器食器の器名は、天平宝字4年末とされる「造金堂所解案」と、宝亀3・4年の奉写一切経所関連文書に見えている。また、土師器生産の関連史料である「浄清所解」からは、土器作手・借馬秋庭女が作った土師器の種類と員数がわかる。これらの器名と、平城宮・京から出土する土師器食器とは、じつのところよく合致するが、器名考証をおこなううえで、一部の器種名を整理統合する必要がある。

Fig. 32では、平城宮出土の土師器に対して、正倉院文書所載土器の名前を与えた。この図によれば、片碗・片坏（枚坏）・窪坏・片盤は法量・器形においてそれぞれ離散的な関係にある。ところがⅢ章で何度か述べたように、片坏はいくつかの考古学的器形を含んでいることが明らかとなった。すなわち杯

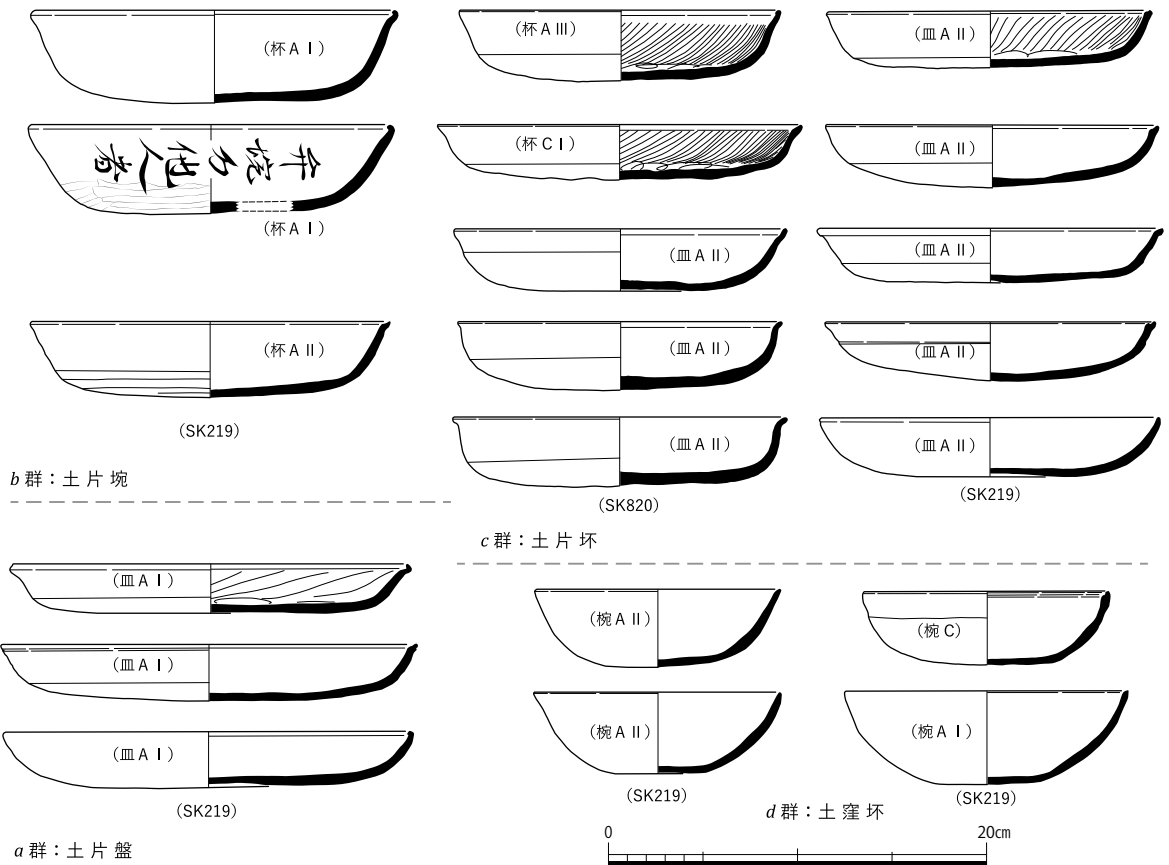


Fig. 32 土師器食器の器名比定（奈良時代後半）

C I・皿 A II・杯 A IIIの三者である（図版1）。考古学者はこれらを器形および器表面に残る技術痕跡、ならびに胎土および色調にもとづいて区別する（Ⅲ章の Fig. 20・22などを参照）が、法量の基本的な一致をとくに重視すれば、土師器の片坏には3つのタイプがある、ということになる。このようにして整理した結果、奈良時代の土師器食器はせいぜい4～5種類を数えるにすぎず、正倉院文書に登場する土師器の器名とはほぼ整合する。

なお、天平勝宝2年の「浄清所解」には碗形、片塊、片盤のほかに「田坏」という器名が見える。これは写経所文書には登場しないが、「田」が「手」の転訛であるならば「手坏」、すなわち小皿の意になると思われる。借馬秋庭女が作った田坏は2,400口と多く、ほかの器種よりも小口径の食器であったことは想像にかたくない。奈文研分類では、土師器皿 C と呼ぶものがこれにあたるか。

碗形と片塊 土師器における塊・坏・盤のちがいは明らかだが、碗形と片塊とのちがいははっきりしない。「浄清所解」では碗形と片塊とを明瞭に区別しており、明らかに別器種とみえるが、そのちがいが何によるかは判然としない。いっぽう、天平宝字4年末とされる「造金堂所解案」では「碗形片塊」という名前が見えていて、その解釈にやや窮する¹⁾。それがひとつの器種を指すのか、それとも1口2文の碗形と、1文の片塊とに区別できるのかがわかりにくいからであるが、本書では後者の見方を採る。つまり、両者は帳簿上で一括されることもあるくらい法量・器形が似通っているが、金属器志向が強いのは碗形のほうであったと解する。土師器の碗形ないしは片塊は、いずれにしても土師器杯 A I ないしは杯 A II に対比できるものと思われる。そうすると深手でより碗に似せた杯 A I のほうが碗形で、それ

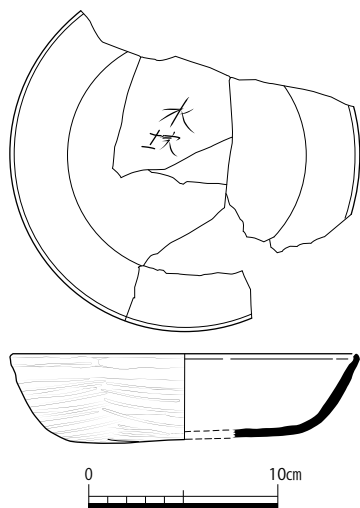


Fig. 33 SK19189の「水坑」

よりもやや浅い杯A IIが片碗であったとするのも一案である。

III章2節でも少し触れたが、内底部に「水坑」との針書を施した杯A Iが、平城宮SK19189・19190で出土している (Fig. 33)。この針書は片碗ないしは碗形が「水坑」でもあった可能性を示しており、長らく筆者を悩ませたが、この事例は次のように解釈したい。すなわち、「水坑」という符牒は現代の「お茶碗」のごとく、飯器（主食用の食器）の名前として当時通用しており、土師器の飯器たる片碗ないしは碗形とは親和性が高かった。そこで1個体の杯A Iにおいて、片碗と「水坑」とが偶々同居することになったのである。

宝亀3・4年の奉写一切経所関連文書には、「土水坑」という有蓋食器の名前も見えるが、土碗形に比して影が薄い。それは土水坑がもともと少なく、しかもほとんど消費されないからである。

土碗形と土水坑との関係は、奈良時代の土器群における杯A Iと杯Bとの量的関係にそのまま置き換えてよいであろう。要するに、土師器碗のなかで優勢なのは土碗形=杯A Iのほうであって、土水坑=杯Bはつねに少数派である。しかしこの両者は、その用途・用法において区別ができないから、土師器のほうでは水坑=碗形・片碗という構図が成立するのである。なお延暦23年(804)8月の「皇太神宮儀式帳」²⁾には、年料土師器(朝夕御饌器)のなかに水真利480口が見えている。このときは助数詞「口」で数えているので、この水真利は無蓋碗(つまりは土師器杯A I)であったことになる。この文脈では、土師器の無蓋碗も水坑たりえたわけで、少数派の有蓋碗を補完しつつ、水坑=飯器という一大カテゴリーを構成していたものと思われる。このように土師器のほうでは、碗形や片碗の異名として、「水坑」という用途名称をあてることもあった。

ii 須恵器食器

麦碗と水坑 II章5節で述べたように、天平宝字2年の御願経書写のときには、7月24日付で「麦碗」と呼ばれた食器が150口請求されている。平城京出土例のなかにも「麦碗」「麦」と書かれた墨書須恵器があり (Fig. 34・Tab. 11・図版2)、史料中のそれとは同じものであることは、別に論じたとおりである³⁾。そのなかで筆者は、御願経書写のときにかぎらず多くの写経事業において、索餅と呼ばれる麺類を大量に消費していることに着目し、先の麦碗がこの索餅を食するために請求されたものと考えた。麦碗の「麦」字は、麺類のことを指しているのである。ところがこのとき、麦碗150口はついに支給されなかった。その代用を果たしたのは水坑109口と碗41口だったのである。

この事実からいえるのは、その用途において麦碗と水坑とが姉妹器種であったということである。水坑はその名義上、水を飲むためのうつわであったかに思えるが、それが麦碗の代用を果たしていることからみて、おそらく食器としても用いられたであろう。麦碗と水坑とのちがいは目下のところよくわからないものの、仮に須恵器に書かれた墨書「水」が水坑の符牒であるならば、それは深手の無台碗(奈文研分類では須恵器杯A I・碗A I・杯Eなど)にあたる可能性がある。例えば、藤原宮東内濠SD2300出土の須恵器杯A I・杯B Iには「水」字を墨書したものが2例あり、その口径×器高はそれぞれ197.0×78.0mm(無台)と、162.0×75.0mm(有台)である(『飛鳥藤原概報9』)。どちらも口径が比較的大きく、

Tab. 11 平城宮・京出土「麦」字墨書須恵器

出土遺跡・地区	遺構	器種	部位	口径 (mm)	器高 (mm)	高台径 (mm)	墨書	図番号	出典
平城宮20次	SD2700	杯蓋	頂部外面	-	-	-	水/麦	Fig.34-6	『平城宮出土墨書土器集成』I (奈文研1983) -174
平城宮128次	SK9608C	杯蓋	頂部外面	-	-	-	□/□/□粥/□ /麦		『平城宮出土墨書土器集成』II (奈文研1989) -437
平城宮172次	SD2700	杯蓋	頂部内外面	-	-	-	(内面) □/五 (外面) 麦		『平城宮出土墨書土器集成』III (奈文研2003) -355
平城京左京二条二坊十二坪	SK69	杯B	底部外面	-	-	128.0	麦垸	Fig.34-1	『平城京跡出土墨書土器資料』I (奈良市2002) -066
平城宮133次	SD1250	杯B	底部外面	173.0	62.0	127.5	麦子	Fig.34-4	『平城宮出土墨書土器集成』II (奈文研1989) -573
平城宮	SD8600	杯B	底部外面	173.3	36.5	130.0	麦坏	Fig.34-2	『奈良文化財研究所紀要2017』(奈文研2017)
平城宮2次	SA109北溝	杯B	底部外面	181.0	56.0	130.0	麦	Fig.34-5	『平城宮出土墨書土器集成』I (奈文研1983) -001
平城京左京三条二坊(二条大路)	SD5100	杯B	底部外面	210.0	75.0	138.0	麦	Fig.34-3	『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』(奈文研1996)
平城宮21次	SB2472	杯B	底部外面	-	-	130.0	麦		『平城宮出土墨書土器集成』I (奈文研1983) -119

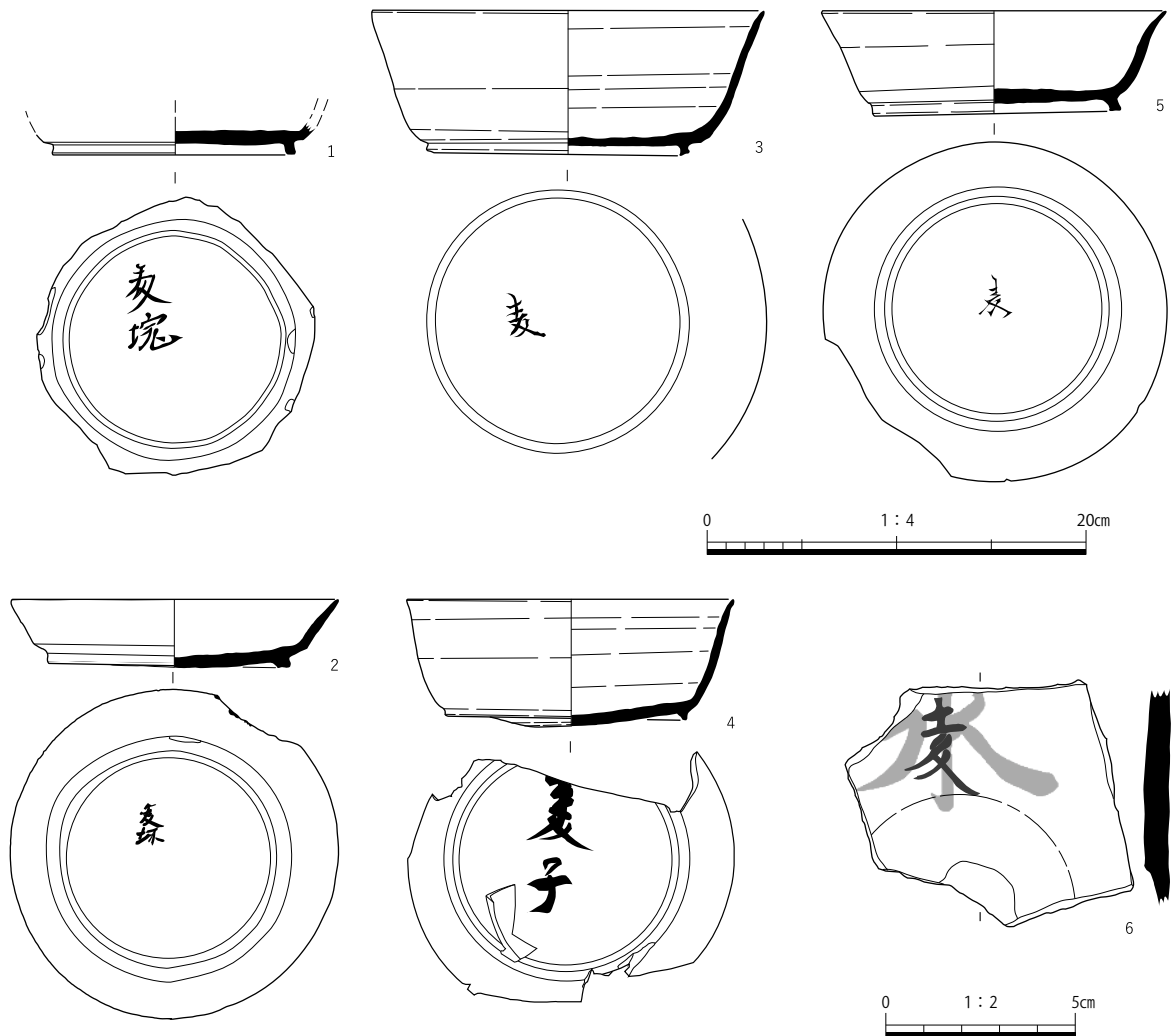


Fig. 34 平城宮・京出土「麦」字墨書須恵器

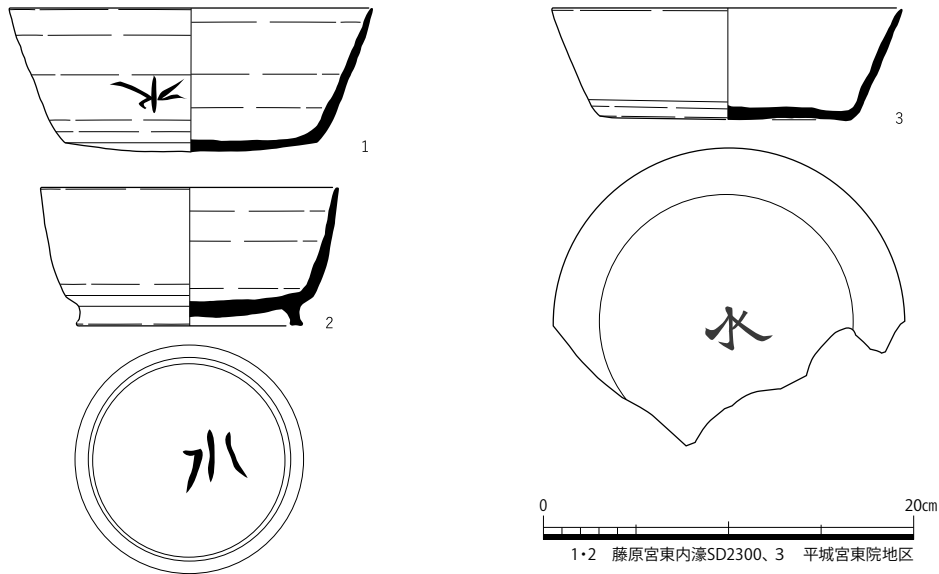


Fig. 35 「水」字墨書須恵器

深手の須恵器碗である (Fig. 35)。また、平城宮出土の「水」字墨書須恵器にも、189.0 × 61.0mmの1例があり⁴⁾、これも水碗にあたるものか。いっぽう麦碗は、現在のところ高台を付した深手の須恵器碗 (奈文研分類では須恵器杯B Iと呼ぶ) がその候補となる。平城宮 SK820 出土須恵器でいえば、麦碗と水碗とが混淆することによって、b群 (Ⅲ章2節の Fig. 24) が形成されたということになる。この両者をどのように識別するかは明らかでないが、「水/麦」字墨書須恵器の例からもわかるように、古代においてもその区別は難しかったものか。

天平勝宝3年以降の写経所文書では、麦碗はわずか1箇所に見えるのみだが、(陶)水碗 (または水麻利・水麻理とも) は全部で26箇所が登場する。つまり水碗は史料上の頻出器種である。これに対し、単に「陶碗」という器名も11箇所に見えていて、それが麦碗か、それとも水碗であったかはわからないが、使用時には両者が区別されていなかったことを暗示する事実ともいえる。そこで本書では、深手の無台碗が水碗、有台碗が麦碗であった可能性に留意しつつも、両者を無闇に区別することはせず、合わせて陶碗という一群をなしたと考えておく。

羹坏・饗坏・塩坏 須恵器杯Aならびに杯Bのうち、大口径かつ深手のものが古代の陶碗にあたるならば、これよりも口径が小さく、また浅手の杯A・杯Bは、主として坏 (つき) にあたるはずである。さて羹坏とは、その名のごとく羹 (汁物) の専用器と思われるが、『奈良朝食生活の研究』にも詳しい解説はない。同書によれば、塩坏は調味用と読めるが、饗坏にいたっては「あるいは酒坏の如きものであったろうか」とあるのみ (327頁) で、用法は必ずしも明らかでない。しかし饗坏と塩坏とは、周忌齋一切経書写のときに混同されているのを見たように、調味用の坏という点では用法に似通ったところがあったとみえる。饗坏とは醬や末醬、酢などを調和させた調味料である「薑 (あへもの)」または「饗料」の容器なのであって、塩坏と同様に、それ自体が「おかず」用の食器であったわけではないのである。このように推量すると、饗坏ならびに塩坏は須恵器杯A・杯Bのなかでも小口径のものであったと思われる。羹坏は水碗・麦碗と饗坏・塩坏との中間を占めていたと考えられよう。要するに、口径ならびに器高が小さくなるにつれて、麦碗・水碗 > 羹坏 > 饗坏・塩坏という序列があったものと思われる。

Tab. 12 写経所文書等に見える羹坏・片坏・塩坏と併記事例

年次	日付	史料	大日本古文書	坏系器種				
				羹坏	片坏・枚坏	塩坏	饗坏	窪坏
天平勝宝4	閏3月17日	写書所雑物請納帳	12-238		坏	塩坏		
	閏3月20日	写書所雑物請納帳	12-239		坏	塩坏		
	閏3月26日	写書所雑物請納帳	12-240		片坏	塩坏		
	閏3月28日	写書所雑物請納帳	12-241		坏	塩坏		
	4月1日	写書所雑物請納帳	12-241		片坏	塩坏		
天平宝字2	7月24日	東寺写経所解(案)	13-476	羹坏			饗坏	
	7月24日	写千卷経所食料雑物納帳	13-254~257	羹坏			饗坏	
天平宝字4	6月25日	奉写称讚経所解(案)	14-404		陶坏	塩坏	饗物坏	
	8月6-7日	後一切経料雑物納帳(中欠)	14-423			塩坏		
	8月28日	後一切経料雑物納帳(中欠)	14-426	羹坏		塩坏		
	10月2日	後一切経料雑物納帳(中欠)	14-430	羹坏		塩坏		
	8月14日	後一切経料雑物下充帳(首欠)	25-272		土坏	塩坏		
	12月?	造金堂所解案	16-295・296		陶片坏 土師片坏	陶塩坏		
天平宝字6	2月9日	宮陶司充器注文	5-104		陶坏	塩坏		
	12月16日	奉写二部大般若経用度解(案)	16-067		坏	塩坏		
	閏12月6日	奉写二部大般若経料雑物納帳	16-123	陶羹坏		塩坏		
	閏12月8日	奉写二部大般若経料雑物納帳(案)	16-129	陶羹坏		陶塩坏		
天平宝字7	4月23日	東大寺奉写大般若経所解(案)	16-381	陶羹坏		陶塩坏		
天平宝字8	7月29日	造東寺司解(案)	16-513		坏	塩坏		
	8月17日	大般若経料雑物納帳	16-519		枚坏	塩坏		
宝亀3	8月11日	奉写一切経所解	6-387・388		陶枚坏 土片坏			土窪坏
	12月30日	奉写一切経所告朔解	6-458・459		陶枚坏 土片坏			土窪坏

Tab. 12 には羹坏・饗坏・塩坏の併記事例をまとめておいた。これによれば、羹坏と片坏(あるいは単なる「坏」とは交互に出現し、併記されることが一度もないが、そのいずれかが必ず、饗坏か塩坏と併記されていることがわかる。つまり羹坏と片坏とは同じ器種を指し、それは饗坏・塩坏とは別の器種である。いっぽう、塩坏と饗坏とは、前者を後者の一部として数える事例(II章7節)があることから、その区別があいまいである。よってその考定にあたっては、羹坏と饗坏および塩坏という2つのクラスを、陶碗・陶盤のほかに見出せばよい。

このような見通しに立ち、おもに平城宮で出土した須恵器食器を用いて器名考証をおこないたい、この作業には2つの問題がある。その第一は東大寺写経所と同時代(天平宝字年間)で、須恵器食器を多く含む土器群が少ないこと。そこでやむを得ず、これよりもやや古い平城宮SK820(天平末年頃)と平城京二条大路SD5100(天平12年頃)の土器群から須恵器食器を抜き出してきて、760年代の東大寺写経所で用いられた食器構成を再現することになるが、ここで第二の問題に直面する。それはこれらの土器群において、須恵器食器がじつに多法量的な様相⁵⁾を示し、単に羹坏・饗坏・塩坏の三者を決めるだけなのに、その候補を絞り込むのが案外難しい、ということである。そこで細かく分類された考古学上の器種を、古器名に対比可能なかたちへと再整理する必要がある。

須恵器食器の法量分布図(Fig. 23・28)によれば、SK820では合計8群、SD5100でも9群のクラスを識別でき、それぞれが古器名のいずれかに対応するものと思われる。このうち、SK820の*b*群が陶碗(麦碗)に、そして*g*・*h*群が饗坏や塩坏にあたる考えると、羹坏≒片坏(または坏)とさまざまに呼ばれた器種は、SK820の須恵器食器では*d*~*f*群に絞られてくる。そこで例えば、器高が小さい*e*群のほうを、のちに陶枚坏に転じることを重視して陶羹坏(陶片坏を含む)に、そして器高が大きい*f*群を陶碗

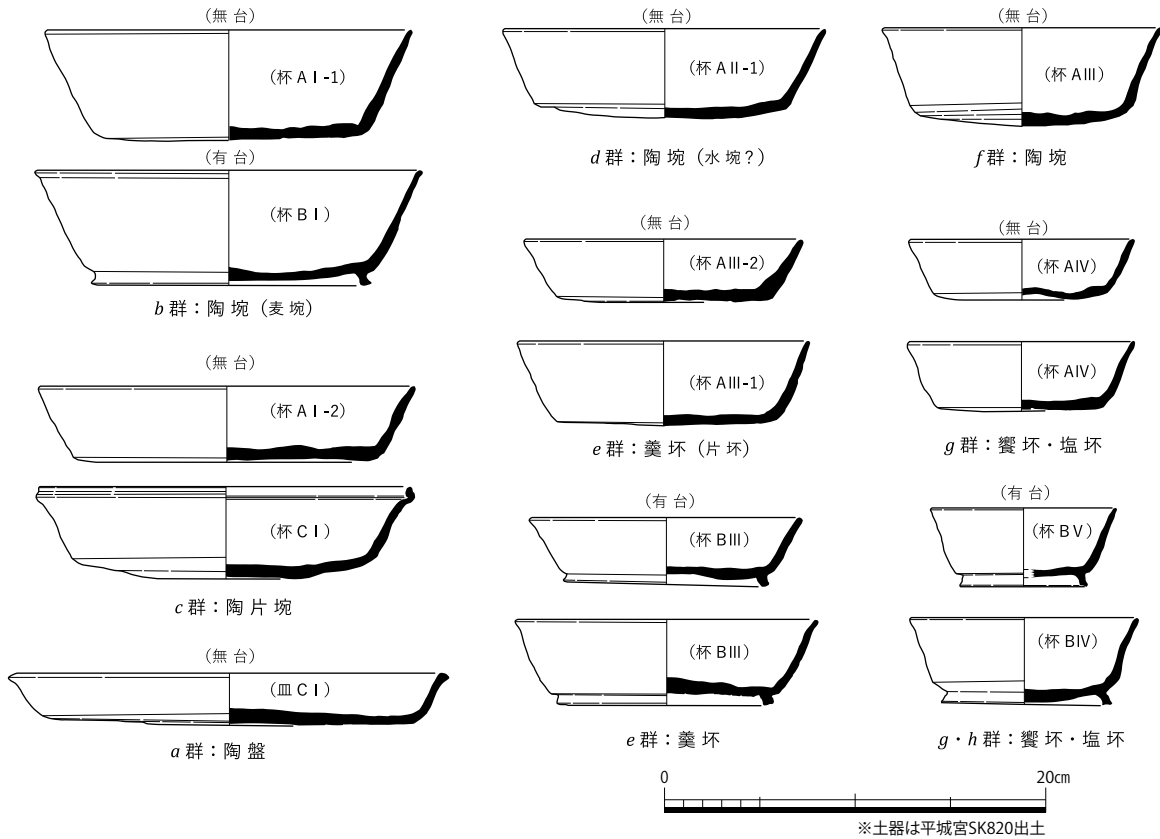


Fig. 36 須恵器食器の器名比定 (奈良時代後半)

にあてておくのも一案である (Fig. 36)。ちなみに f 群は口径 125 ~ 150mm、器高 50 ~ 65mm の深形食器で、他の食器とは明瞭に区別できる実用上の一器種として飛鳥 IV には定着しており、それが奈良時代にいたってもなお使用されているものである。

須恵器食器の構成原理 天平宝字年間の写経所文書に見えている陶器の名前と、平城宮・京で出土する須恵器食器との対応関係を整理してゆくと、陶器の食器構成原理が、土師器のそれとは大きく異なっていることに気づくであろう。端的に言って、須恵器の食器は盤 (佐良) をのぞき、用途を暗示させる一字を冠しているのに対し、土師器にはそれが無い。土師器・須恵器ともに埴・坏・盤という 3 大カテゴリで整序されている点は同じだが、埴と坏との分け方はまるで異なっている。要は土師器と須恵器とで、食器構成は全く同じではなかったということである。

いまここで両者を比較すると、土師器の埴は須恵器とちがいに碗形と片埴とからなり、坏のほうでも土師器は片坏 (のち枚坏) と窪坏とを区別する程度である。土師器における片埴・片坏・片盤は、須恵器よりも食器の種類が少なかったことを暗示していると思われる。しかしながら、東大寺写経所では須恵器の麦埴の代わりに水埴を充てたり (II 章 5 節)、塩坏の一部として饗坏を数えたりしており (II 章 6 節)、結局のところ土師器の食器構成と大差はないのである。したがって麦埴と水埴、それに羹坏・饗坏・塩坏という基本的構成はあくまでも理想的かつ理念的なものであり、実際にはその一部を間引いて用いたのである。

3 東大寺写経所の食器構成

四器・五器構成 正倉院文書からうかがえる食器構成は、おもに天平宝字年間における東大寺写経所と、宝亀年間の奉写一切経所とでやや異なる。前者が写経事業ごとに食器を入手しているのに対し、後者は奉写一切経司から引き継いだ食器を適宜組み合わせ、当座の食器セットとしているからである。本節では、主として天平宝字年間におこなわれた写経事業の食器セットを見比べてみよう。

Tab. 13では、東大寺写経所で使用されたとみられる食器の器名とその員数をまとめた。この表によれば、食器はおもに土器からなり、碗+坏+盤を基本的な構成としていることがわかる。例えば、天平勝宝3年の写書所では

筒+水碗+坏+塩坏+陶盤・・・**五器構成**（陶器のみでは四器）

が使用されていた。また、天平宝字2年の御願経書写のときは

麦碗+羹坏+饗坏+片盤・・・**四器構成**

が請求されていたし、天平宝字4年の奉写称讃経所でも、

鏡形+大片碗+陶坏+塩坏+盤・・・**五器構成**

であった。さらに、経師集めに苦勞した周忌齋一切経書写のときは、事業開始当初に方々からかき集めた食器から、そこでの需要を満たすだけの員数が揃うものを抜き出すと、

大筒+陶片碗+土坏+塩坏+佐良・・・**五器構成**

という食器構成がうかがえる。そして天平宝字6年以降の3事業では、次節で詳しく述べるように筒+陶碗+陶片碗+羹坏+塩坏+陶盤という六器が標準となっている。

水碗は飯器か 陶器における四器と五器とのちがいは、Tab. 13によれば片碗を含むかどうか起因している。つまり碗が1種類か、それとも2種類あるかによって、一人前の食器構成が変わるのである。そのいっぽうで、坏は副食器としての羹坏=坏と、調味皿としての饗坏または塩坏とからなり、このうちのいずれかを欠く事例は確認できなかった。また盤（佐良）は、一人前の食膳に必ず1口は付く。

さて五器構成の場合、碗と片碗とのどちらが飯器として用いられたのであろうか。写経所の食器には①陶碗=水碗/麦碗と②片碗との2種類のほか、「鏡形」という器名も見える。そしてこの鏡形が、Tab. 13では陶碗=水碗/麦碗の欠如を補っているようにみえるであろう。ここから考えられるのは、陶碗とも水碗・麦碗とも呼ばれる器種が、その用途において鏡形とは互換的な関係にあるということである。

Tab. 13 東大寺写経所の食器構成

写経事業	事業期間	木製容器		碗			坏		盤
		筒	折櫃	陶碗/水碗・麦碗	鏡形	片碗	坏=(陶)羹坏	饗坏・塩坏	
写書所	勝宝3年~4年	13合		水碗 13口			坏 13口	塩坏 26口	陶盤 13口
御願経書写	宝字2年6月~11月			水碗+碗 150口			羹坏 200口	饗坏 150口	片盤 150口
奉写称讃経所	宝字4年6月~7月				200口	大片碗 200口	陶坏 100口	塩坏 100口	盤 100口
周忌齋一切経	宝字4年8月~5年5月	138合	50合	水碗 15口		陶片碗 250口	土坏 100口	塩坏 200口	佐良 200口
石山院奉写大般若経所	宝字6年2月~12月	30合	30合	陶碗 40口		片碗 60口	陶坏 60口	塩坏 60口	陶盤 60口
大般若経二部千二百卷	宝字6年12月~7年4月	60合	41合	陶碗 100合		陶片碗 100口	陶羹坏 100口	塩坏 90口	陶盤 111口
大般若経一部六百卷	宝字8年8月~12月	44合	22合	陶水碗 30合		片碗 80口	坏 80口	塩坏 80口	陶佐良 80口

ある。そしてここで、鉢（かなまり）が飯器として使用されたことを示すいくつかの証拠として、鉢で水飯を食べすぎる三条中納言の話（『今昔物語集』本朝部 卷第二十八）や、「大盤振舞い」の語源ともいわれる碗飯（おうばん）の習慣、それに『延喜式』に垣間見える土師器の「飯碗」（卷35 大原野祭料・松尾祭料）・「飯盛土碗」（卷35 平野祭料）という器種の存在を思い起こすと、結局は陶碗や水碗・麦碗も、その用途において鉢形と同格であったといえるであろう。また上では、麦碗が水碗によって代用されたことを見たが、これも水碗が飲器としてではなく、麺類を含む米麦類を食べるための食器として用いられたことを暗示しているように思われる。

要するに、大口径で深手の碗は、土・陶を問わず飯器であったと考えるわけである。そして須恵器にかんしていえば、「水碗」とはいいながら、実際には飯器として用いられたのではないだろうか。これは現代日本人が、「お茶碗」を喫茶用の飲器としてではなく、飯碗として用いていることと案外よく似ているのである。

須恵器中心の食器 ところでⅡ章9節では、天平宝字6年から7年にかけての大般若経二部千二百卷書写（以下、二部大般若経と呼ぶ）のとき、食器がすべて須恵器であったことを述べた。予算書案などでは土師器か須恵器かが判然としなかった器種が、決算報告案ではすべて須恵器であったことからみて、この写経事業では土師器の食器を用いていなかったと考えられる。このときの食器構成は、

六器構成： 大筒+陶碗+陶片碗+陶羹坏+陶塩坏+陶盤（大筒以外はすべて須恵器）

であったが、これとまったく同じ食器構成は、ほかの写経事業でも用いられていた。そのひとつが石山院奉写大般若経所でおこなわれた大般若経書写事業（天平宝字6年、石山院大般若経という）で、もうひとつは大般若経一部六百卷書写事業（天平宝字8年、一部大般若経と呼ぶ）である。前者は造石山院所にある仮設の写経施設で大般若経の書写を開始するにあたり、笥陶司から経師らの食器として充当されたもので、その組み合わせは

六器構成： 筒+陶碗+片碗+陶坏+塩坏+陶盤

である。また後者のときも、その予算書案では

六器構成： 大筒+陶水碗+片碗+坏+塩坏+陶佐良

となっていて、二部大般若経および造石山院所で用いられた食器とは基本構成が同じである。これら三者の間では、陶羹坏は「陶坏」とも、単に「坏」とも書かれていて、その表記に揺れがあるものの、塩坏との対他関係において、これらが同じ器種を指すのが明らかである。二部大般若経のときの食器構成を参考にすると、これらはすべて須恵器の食器を指している可能性が高い（Tab.13の網部）。

また、Tab.13に掲げた器名のうち、明らかに土師器を指しているのは周忌斎一切経書写のときの「土坏」または「土碗」100口のみであって、そのほかが土師器であったとは断言できない。そして上で見たように、用途名称をもつ碗類・坏類が須恵器を指すならば、天平宝字2年の御願経書写のときの四器（水碗+羹坏+饗坏+片盤）も、やはり須恵器であったと考えられるのではないか。天平宝字年間の東大寺写経所では、おもに四器ないしは五器からなる須恵器の食器が用いられたというのが、本書の結論のひとつである（図版3）。ここで須恵器が用いられたのは、その堅牢さのゆえであろうか。

西弘海の解釈 二部大般若経および一部大般若経の2事業にかんしては、その食器構成について、すでに西弘海の詳しい検討⁶⁾があるので、ここでその概要を示しておこう。西がこの2事業に着目したのは、その用度解案（予算書案）から食器の構成と人員数とが判明しているうえ、ことに一部大般若経のときは、「造東寺司解案」として米・調味料・副食品の人別支給量も明らかなたためである。どちらも予算書案に

基づいているので、実態とは若干異なると思われるが、それでも写経所内の人員に対し、どのような組み合わせで食器セットを支給したか、じつに合理的な推定をおこなっているといえる。本書の解釈とは異なる部分もあるものの、ここで西の所論を整理すると、およそ次のとおりとなる。

これら2事業の間では、予算書案で計上された食器の種類および員数と、それらを支給されることになる人員とのバランスがよく似ている (Tab. 15a・16a；西 1978 の第4表を転載)。そこで西は、2つの予算書案から基本的に同じ食器構成を復元した。すなわち、

- 六器構成：** 大筥+陶水碗+片碗+坏+塩坏+佐良・・・経 師
- 五器構成：** 大筥+片碗+坏+塩坏+佐良・・・・・・題師・装漬・校生
- 四器構成：** 片碗+坏+塩坏+佐良・・・・・・膳部・雑使・駈使

という3種類の食器セットである。

西はこれにくわえて、一部大般若経のときの人別食料支給量 (米・調味料・副食品) を考慮に入れ、写経所内の人員には、その職掌に応じた4つの階層があったと考えた (Tab. 14；西 1978 の第5表を修正のうえ転載)。要するに、先の食器セット3種類と、事業所内格差との間には何らかの相関があると、西は考えたようである。さて、この解釈に対して、筆者はいま否定も肯定もできないが、とてもよくできた見方であると、まずは言うておこう。第一に、格差が食料支給量の差として、また食器の多少によって表示されることは、古代の現実として確かにありそうな話である。しかし厳密に言えば、西がその原著で掲げた集計表には、史料の原文と対照したところ一部に誤りが見つかり、さらにはその表で示された数字の解釈をめぐるも、ほかの見方が成り立つ余地がある。したがって西が考えたような、身分・職掌に応じた3種類の食器セットが実在したか、じつはよくわからないのである。

そこで、Tab. 15a・16a について誤記を修正し、またどの身分にはどの食器が行き渡るかについて、別の可能性を示したのが Tab. 15b・16b である。これら修正表によれば、どちらも飯器と目される大筥が支給される可能性があるのは、二部大般若経のときは経師以下雑使まで (合計60人で、実際に購入した大筥の数に一致する)⁷⁾、また一部大般若経のときも経師から雑使まで (合計44人で、計上した大筥の数と合致する) と見るべきで、西が考えたように、膳部・雑使には大筥が行き渡らなかったとはいえない。なぜ西が、大筥の支給は写経従事者のみと考えたのか、よくわからない。しかしながら、それぞれの予算

Tab. 14 造東寺司解案による人別食料支給例 (西1978の第5表を修正)

	主 食	調 味 料							副 食 品										
	米	塩	醬	末醬	酢	糟醬	芥子	胡麻油	漬菜	青菜	海藻	滑海藻	布乃利	大凝菜	小凝菜	糯米	大豆	小豆	小麦 (値)
経師	2升	5勺	1合	1合	5勺	1合	2勺	4勺	2合	4文	2両	2両	2両	2両	2両	1合	2合	2合	2合
題師	2升	5勺	1合	1合	5勺	1合	2勺	4勺	2合	4文	2両	2両	2両	2両	2両	1合	2合	2合	2合
装漬	2升	5勺	1合	1合	5勺	1合	2勺	4勺	2合	4文	2両	2両	2両	2両	2両	1合	2合	2合	2合
校生	1升6合	2勺	6勺	6勺	2勺	1合			2合	2文	2両	2両	2両	2両	2両	1合	2合	2合	2合
膳部	1升2合	2勺				1合			2合		1両	1両							
雑使	1升2合	2勺				1合			2合		1両	1両							
駈使	黒米2升	2勺				1合					1両	1両							
調理食品	飯・粥								菜漬物		羹物・糞物		餅・イリマメ (トコロテン)			餅・イリマメ		(ウ) 索餅 (ド) 餅	

Tab. 15 予算書案に見える人員数と食器の積算① (西1978の第4表とその修正案)

Tab.15a 奉写二部般若経用度解案の食器用口数 (西1978)

	大筒	陶水椀	片椀	杯	塩杯	佐良
	58合	40合*	120口	120口	120口	120口
経師 40人	○	○	○	○	○	○
題師 2人	○		○	○	○	○
装演 4人	○		○	○	○	○
校生 8人	○		○	○	○	○
膳部 2人			○	○	○	○
雑使 4人			○	○	○	○
駈使 16人			○	○	○	○
計 76人	54合	40合	76口	76口	76口	76口

*原文30合

史料は「奉写二部大般若経用度解案」(大日古16-059~068)

Tab.15b 「東大寺奉写大般若経所解案」から推定した支給対象

	大筒	陶水椀	陶片椀	羹坏	塩坏	陶盤	食器構成
	60合	100合	100口	100口	90口	111口	
経師 40人	○	○	○	○	○	○	六器
題師 2人	○	○	○	○	○	○	
装演 4人	○	○	○	○	○	○	
校生 8人	○	○	○	○	○	○	
膳部 2人	○	○	○	○	○	○	
雑使 4人	○	○	○	○	○	○	
駈使 16人	×	○	○	○	○	○	五器
計 76人	59合	76合	76口	76口	76口	76口	

○・×はそれぞれ支給対象/支給対象外と推定。

史料は「東大寺奉写大般若経所解案」(大日古16-376~382)

Tab. 16 予算書案に見える人員数と食器の積算② (西1978の第4表とその修正案)

Tab.16a 奉写大般若経一部用度の食器用口数 (西1978)

	大筒	陶水椀	片椀	杯	塩杯	陶佐良
	44合	30合	80口	80口	80口	80口
経師 30人	○	○	○	○	○	○
題師 1人	○		○	○	○	○
装演 2人	○		○	○	○	○
校生 6人	○		○	○	○	○
膳部 2人			○	○	○	○
雑使 3人			○	○	○	○
駈使 10人			○	○	○	○?
計 54人	39合		54口	54口	54口	54口?

史料は「造東寺司解案」(大日古16-505~514)

Tab.16b 「奉写大般若経一部用度」にみえる食器の推定支給対象

	大筒	水麻利	片椀	椀坏	塩坏	佐良	食器構成
	44合	80合*	80口	80口	80口	80口	
経師 30人	△	○	△	○	○	△	六器?
題師 1人	△	△	△	△	△	△	
装演 2人	△	△	△	△	△	△	
校生 6人	△	△	△	△	△	△	
膳部 2人	△	△	△	△	△	△	
雑使 3人	△	△	△	△	△	△	
駈使 10人	×	△	△	△	△	△	五器?
計 54人	44合	80合	54口	54口	54口	54口	

○は収納帳より、実際に支給されたことが明らかなもの。

△は収納帳に見えないが、Tab.13・15bを参考にし、実際に支給されたと推定。

*はTab.15bを参考にし、片椀・椀坏・塩坏など同じ数を用いたと仮定した。

書案において、大筒のみが58合、44合と端数を含んでいて、ほかの食器のように10口単位の概数ではないことを考慮すると、大筒は余剰を見込まない、予算書案のある人員数に対応しているとみるべきである。なお二部大般若経のときは、宿所で用いる寝具として畳・蓆を58枚ずつ計上しており、これは大筒の数と一致する。つまりこのとき、大筒は駈使以外のすべての人員に支給する予定であったことになるだろう。また、二部大般若経のときの陶椀40合(Tab.15a)は、この事業の決算報告である「東大寺奉写大般若経所解(案)」(大日古16-376~382)では100合となっていて、およそ80人の全員に支給できたことになるので、Tab.15bではこの点を修正した。

いっぽう、一部大般若経のときは書写の開始に合わせて水椀30合、椀坏・塩坏・佐良各30口を政所に求めている(「大般若経料雑物収納帳」、大日古16-517~519)が、これらは経師30人に支給したものと考えられ、題師以下駈使までの食器構成にかんしては何も教えてくれない。史料の欠落により、支給された食器の実数を明らかにできない以上、西説の正否は検証不可能である。こうしてTab.16bは大部分が推定となるが、実際には二部大般若経のときの食器構成に準じたものであろうか。

このように考えると、天平宝字6年から同8年にかけての東大寺写経所では、判明するかぎり六器構成:大筒+陶水椀+陶片椀+陶羹坏+陶塩坏+陶盤(ただし、駈使は大筒を欠く)がおもに用いられたと考えられ、先の推定と矛盾しない。

要するにこの時期、造石山院所や東大寺写経所で実施された写経事業では、須恵器の五器に大筒（飯器）をくわえた食器セットが標準的に用いられており、駆使のみが大筒を欠いていたと考えられよう。したがって、西が考えたようにわざわざ3種類の食器セットを想定する必要はなく、むしろ食器構成で表示される格差は小さかったともいえるのである。

吉田説の検討 ここでもうひとつ、別の学説を検討しておこう。吉田恵二は、東大寺写経所における食器構成を五器一組、四器一組、そして三器一組の3種類として復元した⁸⁾が、これは写経事業ごとに史料を整理し、相互の関連性を検討したうえでの解釈ではない。例えば五器一組の事例として、吉田は複数例を挙げる（吉田1982：111頁）が、このうちのいくつかは奉写二部大般若経のときの食器セットを異なる事例として数えたものらしい。また、彼のいう四器一組の事例（「写書所納物帳」、大日古3-537に拠る）は、天平勝宝3年5月7日付の筒+陶盤+坏+塩坏（塩坏のみ26口で、残余は各13口）からなるというが、翌8日付で収納した水碗13口を見逃しているため、実際には13人に充てた五器一組の事例とみなすべきである。そこで四器一組といえるのは、御願経書写のときの水碗（および碗）+羹坏+饗坏+片盤の1例しかない⁹⁾。また吉田がいうように、三器一組というセットが実在した可能性は否定できないが、彼は日付を同じくして偶々併記された3つの器種が、そのまま一人分の食器セットであったとみなしている節がある。ところが「写書所雑物請納帳」（大日古12-238～242）にかんしていえば、本書Ⅱ章4節（Tab.2）で整理したように、日付ちがいで納入された五器（筒・水碗・坏・塩坏・佐良）で一組のセットがつくられた可能性があり、そのほうが他の事業で用いられた五器・六器一組との整合性を考えやすい。本書の成果を勘案すると、少なくとも写経従事者が三器一組のセットを用いた形跡はないから、それは本来の食器セットが部分的に見えているにすぎないのではないか。吉田説はこのように、史料の分析に粗漏な部分があるので、この点注意が必要である。

大筒と陶碗との関係 本節の最後に、大筒と陶碗とが、どうして1人前の食器セットのなかで同居しているかについて考えておこう。両者は材質が異なるが、大筒は木製の飯器であって、陶（水）碗も須恵器食器のなかではおそらく飯器の役割を占めている。また大筒のほうは、上述のようにきっかり所要人員分を見積もっているのに対し、陶碗のほうはその損耗を見込んだかのような概数での請求となっている。これらのいずれが、普段の飯器であったかはよくわからないが、単に炊いた米を食するときは、おもに大筒を用いたものか。いっぽう、陶碗はそのなかに麦碗・水碗を含んでいるとみられるので、純然たる米飯専用ではなく、麺食や飲用にも用いられるなど、もう少し用途が多様であったように思われる。二部大般若経のときには、事業期間中に索餅941藁を、値2,907文で購入したことがわかっている（大日古16-379）。写経生らは、これを陶碗で食したと考えるわけである。

4 奉写一切経所の食器構成

東大寺写経所とのちがい 宝亀年間の奉写一切経所で用いられた食器の構成は、始二部一切経写経事業（宝亀3年2月～同4年6月）のときのみ明らかである。宝亀3年2月時点で、奉写一切経司から現物で支給された食器には土碗形、土水碗、土片坏、土窪坏、土盤と陶水碗、陶枚坏、陶盤の8種類があったが、これらの間ではその後の消費状況が大きく異なる。食器として用いられ、その消耗にともない頻繁に交換されたと考えられるのは、土碗形と枚坏（土・陶）、土窪坏、そして盤（土・陶）の4種類である。例えば宝亀4年7月・8月の告朔解案には、「備経師等供養料」つまり経師らの食器として、土碗形、土枚坏、土窪坏や陶盤が挙げられている。なおこの頃までに土盤は払底しており、陶枚坏もほとんど残っ

ていない。

その一方で、土水埵がさかんに実用されていた形跡はない。それは宝亀3年2月から同4年9月末までの20か月で18口が減ったにすぎず、写経所の人員には到底行き渡らない。また陶水埵は「硯并筆漬料」（「奉写一切経所告朔解」、大日古6-305および6-393）とあり、やはりそれが食器として用いられたとはいいがたい。実際その用口数は著しく少なく、この点でも枚坏や窪坏など、食器として実用された器種とは大きな差がある。およそ10年前の二部大般若経のときは、確かに食器として用いたように思われるが、始二部一切経のときは、用い方がまったく異なっていた。つまりこの写経事業のとき、陶水埵は硯として、または筆洗用の容器として用いられたとみなす。

土・陶のちがいを別にすれば、始二部一切経書写のときに使用された食器の基本構成は、実際にはほとんど使用されていない土水埵を除くと、土鉢形+枚坏+窪坏+盤の四器である（図版4）。しかし天平宝字年間の東大寺写経所と大きく異なるのは、見かけにおいて土師器食器が多く用いられていることである。これは奉写一切経司（あるいは西大寺写経所）から引き継いだ食器の過半数が土師器であったことを直接反映するものである。

ここで東大寺写経所時代の典型的な食器構成として、二部大般若経のときのそれを比較に用いると、食器構成が様変わりしていることにも気づくであろう。まず、土器のなかでは飯器にあたりとみられた陶埵は、奉写一切経所では土鉢形に置き換わっていると考えざるをえない。また、前者の羹坏・塩坏と相同の関係にあるのは、後者では枚坏と窪坏になっている。しかも奉写一切経所では、大筒など木製食器が多用されていた状況はうかがえない。

決定的なちがいはほかにもある。二部大般若経はおよそ5か月間続いた写経事業であったが、このときは事業の初期に購入された食器が、途中で交換された形跡はない。その購入記録と決算報告書案との員数は基本的に一致しているので、支給された食器はかぎられた余剰分のなかでしか交換できなかったと考えられる。よって写経生らは、事業の初めに支給された食器を使い続けたのであった。しかし奉写一切経所では、増減はあるものの毎月土器を卸して、いわば在庫を食いつぶすようにして土器を消費しており、なかには宝亀4年2月（始二部写経事業）の告朔解案に見えるように、この月に食器の用口数が増えていて、まるで食器の一新が図られたようにもみえる。つまり奉写一切経所では、およそ10年前の東大寺写経所の時分とは異なり、土器の消費がなぜか浪費的になっている。これは事業期間が長いことともむろん関係があるが、それ以前に土器の在庫を大量に抱えていることが、大いに関係しているといえるであろう。考えてもみれば、盛期にあっても80人規模の事業所が、各器種合わせて3,600口に近い在庫を保有していることが、土器の相次ぐ支給を可能にしているのである。

食器支給の要望書　ここでひとつ、興味深い史料を紹介しておこう。宝亀3年11月16日、高向小祖をはじめとする14名の経師らが「食器漏失」を訴え、新しい食器の支給を求めたのである（「高向小祖等連署解」、大日古20-329）。この史料に名前が見える経師らの人間関係をあれこれ詮索すると、それはそれぞれおもしろい見通しが立つが、この話はコラム②（本書82頁）にまとめることにしたい。要するに、ベテランの経師たちがあるとき結託し、食器を失くしたから新しいのを寄越せと言いつつ立てたのである。このことからいえるのは、食器（種々の史料からみて、それは土器であろう）は経師ら一人ひとりが管理しており、必要があればその支給を要求できた、ということである。さらにいえば、食器は単に壊れたから交換されるのではなく、表向きは特殊ながら「紛失」も新品支給の事由になりえたのである。この事案についてはほかに史料がなく、どのような食器構成であったかはわからないが、おそらく上で推定し

たような碗形+枚坏+窪坏+盤という四器構成ではなかったか。

奉写一切経所関連史料は膨大だが、食器セット一式を復元しやすい静的な史料¹⁰⁾(予算書案など)がないので、東大寺写経所の史料群に比し、食器構成の復元精度がやや低い感がある。その史料は、むしろ土器の消費やライフサイクルを考えるのに向いている。しかし、その議論は本書の目的から逸脱しているので、これ以上は追究しない。

5 写経所における食と食器

一膳分のセット 上で縷々述べてきたように、古代の食器は基本的に碗・坏・盤の3種で成り立っている。このうち、もっとも器形が深いのは碗(まり・もひ)である。杯(つき)は碗よりも浅く、盤(さら)よりは深い。

碗・坏・盤の区別は、おもにその用途のちがいに対応しているであろう。このうち碗と坏とは、期待される用途やその器形によってさらに細分されている。例えば、碗には麦碗と水碗とがあったようで、須恵器の坏には羹坏・饗坏・塩坏の3種類があった。また土師器にも、碗類には片碗(かたもひ)と碗形とがあり、坏類には枚坏と窪坏とがあった。用途や器名で細分されていないのは盤だけである。

ここで水碗と麦碗、そして羹坏・饗坏・塩坏とを並べてみると、碗類は飲器または麵食用の食器、坏類は副食器ということになろう。「今昔物語集」本朝部に見える三条中納言の話や、『延喜式』中の「飯碗」「飯盛土碗」という器名を引き合いに出すまでもなく、古代の碗類は飯器であった公算が高い。現代の飯器を「お茶碗」と呼ぶように、古代の飯器には「水碗」が含まれていたと考えても、一概に否定できるものではない。またⅡ章5節で述べたように、天平宝字2年の御願経書写のときには、おもに麵類用の食器であったとみられる麦碗の代わりに水碗が支給されていて、後者が単なる飲器でなかったことは明らかである。

そこで本書では、ひとつの前提として碗類を飯器(または麵類など準主食用の食器)とみなし、これに副食器たる坏・盤がくわわることで、一人前の食器構成ができあがったと考えることにしたい。この見方によれば、古代の食器構成には1人当たり1口の碗が付いたと考えられる。つまり碗類は、食器構成の基幹をなす器種である。問題は、1個の碗に対して坏・盤がどれくらいくわわるか、であろう。上で詳しく見たように、東大寺写経所で使用された食器構成は碗類1・2個に対して坏が2種類で1口ずつ、盤が1口というのが標準的である。経師ら1人に対しては、大筥などの木製食器を除けば、四器ないしは五器が充てられたのである。

現在のところ、副食器たる坏・盤にどのような食べ物を盛りつけたかはわからない。しかしながら、饗坏ないしは塩坏が調味用の食器で、前者が末醬ないしは醬・酢を、後者が文字どおり塩を入れたものとして、いわば調味用のうつわであったことは想像にかたくない。羹坏は饗坏や塩坏よりは大きく、やはり羹(汁物)の食器であったのだろうか。盤類が副食器であったのはよいとしても、これはこんにちの皿と同様に、その用い方はさまざまであったらう。

器名研究の限界 ここまで見てくると、東大寺写経所で実際に使用された一人分の食器セットは、おおむね合理的に推定できたといえるのではないか。しかしながら、本研究の方法は、既往の研究に比し十二分に緻密かつ精細でありながら、結論のみを切りとってくると、大きなちがいがないのである。例えば、西弘海(1978)や吉田恵二(1982)が示した食器構成の復元案(四器から六器)とは大同小異であり、細部に見解の相違こそあれ、本研究によって40年前の先行研究が、大筋で正しかったことを検証した

ような構図さえ見てとれる。I章で述べたように、古器名の研究はまったく人気がないが、そのなかでも数少ない先行研究をはるかに超越することは、案外難しいものである。結局、土器とその器名との対応関係を整理しつつ、東大寺写経所における食器構成を復元しようとする試みは、おそらくこれ以上には発展しないであろう。そこで筆者は、食器と食物との直接的なかかわりについて考えることで、この閉塞感を打開したいと考えるようになった。もっと簡単にいえば、どの土器で何を食べたか、それを明らかにしようというのである。つまり、容易には明らかにできないことを考えなければ、この方面での進展はありえないと思い始めたのである。

ところがこの方面の研究は、すぐにある問題に逢着する。端的に言って、食器と食物との直接的な関係は、多くの場合明らかにできない。西弘海(1978)がその文末で、「これ以上食器類の用途を詮索することは、先に述べた食器の性質からしても、ほとんど無益」と述べたように、どの食器に・いかなる食物や料理を盛り付けたかは、結局わからないのである。そしてなぜ、この種の問題には答えが出せないかといえば、それはこの食器にはこの料理という、いわば排他的な対応関係が認められないからであろう。西田泰民¹¹⁾の言を借りれば、「・・・器形と用途は1対1の関係にはなく、1つの器形に対し複数の用途がありうるものがむしろ当然である。したがって当初から厳密な対応関係を想定するのではなく、緩やかなまとまりを考えるほうが現実にふさわしい」はずである。それは例えば、天平宝字2年夏の御願経書写のとき、どうやら麵食用のうつわとして請求されたとみられる麦碗150口の代わりに、水碗109口と碗41口とが支給されたことから十分想起できることである。米にせよ「麦」こと索餅にしても、それを食するのには麦碗でも水碗でもよかったのである。ならば食器から食物を考えようとする多くの試みは、残念ながら容易には成功しないことになるだろう。

再現料理と土器 西弘海が述べたように、不可知の問題に取り組むことを無益とみなすのもひとつの見識だが、しかし土器という生活用具が実際どう用いられたか、とくに知らなくても土器研究はできるという、一種の割り切りを見せつけられたようで、この点やや得心がゆかない。そこでそれへの抵抗の意味を込めて、筆者はある再現料理を複製須恵器に盛り付けてみることにした。このいい加減な試みが、たとえ本書の学術的な価値を半減させるとしても、筆者はそれをやってみたくて仕方がなかったのである。

この研究費で複製してもらった須恵器食器に、索餅に見立てた麵類を盛り付けるとどう見えるか。拙論「麦碗と索餅」¹²⁾で述べたあるイメージに基づき、筆者はその再現を試みたのである。古代の索餅は手延べ麵とされるので、このときは市販されているやや幅広の素麵を用いた。また、索餅は醬や末醬、酢などを和えた「饗料」で食したと想像できるから、市販の味噌を米酢で延ばして饗料とし、それを麵に絡めてみたのがFig.37である。このとき用いたのは口径16.0cm強、深さ5.5cmの須恵器碗で、筆者が想起した「麦碗」によく似ている。というのも、この複製品は実物の「麦」字墨書須恵器をモデルに陶芸作家さんにお作りいただいたものなので、その再現性はきわめて高いのである。このようにして、筆者は天平宝字年間の東大寺写経所で、あるいは実食されたかもしれない麵の一例をまずは再現したのであった。そしてこのときの盛り付け例は、いわゆる炸醬面(日本ではジャージャー麵という)に近い見た目となった。おそらく、筆者がかつて中国鄭州の街角で食した炸醬面が、この着想の根底にあったものと思われる。

この想像の産物にかんしては、あるいは異論も生じよう。実際、筆者に近いある研究者は、写経所の索餅を汁麵であったと想像している。ところが筆者は、この異論を排するだけの明白な証拠を、何ひ



Fig. 37 索餅の盛り付け再現例

とつ握っていない。ただ「饗料」を出しているのだから、きっとそれを絡めて食したにちがいないと思っただけである。それよりも、醬のイメージが固まらないまま、とりあえず味噌で代用したところに再現上の課題を認めるので、この点は大いに改善の余地がある。もとより、古代の食は不可知の領域に属しているので、このように愚の骨頂ともいべき精神の持ち主でなければ再現できない。

多くのことが知られてしまった今、なお未知の事柄はこのように、易々とその輪郭を見せてくれるわけではない。しかしながら、土器という器物の本質を理解することは、単にその形質に拘泥することではないはずである。例えば、杯A、杯B、杯C・・・、あるいはa手法、b手法、c手法などとして区別されるさまざまな皮相的な形質とは無関係に、土器は食物の容器であったのである。これはどういうことかといえば、土器はその可容性というか、その内側に何かを受容できる空間をそなえていて、それがこの器物の本質であるということである。ところがその中身はもはや残っていない一要するに、土器の本質は目に見えない。そこで、目に明らかな部分、土器の顕在的な部分を見つめることで成立しているのが従来の土器研究というならば、筆者の関心はその「見えないもの」に移りつつある。すなわち、古代の人びとは土器で何を・どのように食したか、である。本書では結局、食器と食物との関係について述べることはあまりできなかったが、古代の土器研究は今後、この方面にも関心を拡げるべきである。

なぜ、蓋がないか 最後にひとつ、ある問題提起ともなるひとつの補足をおきたい。東大寺写経所で使用された陶器（須恵器）の食器は、陶（水）埴を除けば、ほとんどが「口」で数える無蓋食器である。ところが平城宮・京では、これまでの発掘調査で須恵器の杯蓋が大量に出土している。要するに、須恵器食器の蓋の有無にかんして、写経所文書からうかがえる古代の実態と、考古学的な現実との間には、かなり大きな隔りがある¹³⁾。

今回の計量的分析では、食器本体の大きさをとくに重視したので、杯蓋の計測は実施していない。したがって、今回明らかにした須恵器食器のどの器種に蓋があったか・なかったかは、本書ではわからないのである。そこで今後は、須恵器の杯蓋の計測を実施するとともに、東大寺写経所の須恵器にはなぜ

蓋がないかを、いずれ考える必要があるが、その前に（陶碗をのぞく）須恵器食器を、蓋なしの状態を取りそろえることができたという古代の現実に、想像をめぐらせることができよう。例えば、二部大般若経書写（天平宝字6・7年）のとき、市領に命じ市で購入させたおよそ100人前の食器のうち、陶碗をのぞく陶片碗・羹坏・塩坏などは無蓋の状態で購入している。平城京の市場では、蓋なしの須恵器も購入できたのである。常識的に考えると、それらは「合」で数えた有蓋食器よりも安価であったにちがいない。となると、写経所の給食には安物の須恵器が充てられたわけである。実際、この事業の決算報告案である「東大寺奉写大般若経所解案」によれば、市で購入した陶碗の価格は1合につき3.5文であるのに対し、陶片碗は1.8文でほぼ半額となり、同じ碗に属していても、蓋の有無で値段は大きく異なる。無蓋の陶羹坏にいたっては1口あたり1.0文、陶塩坏は0.9文で、さらに安い（大日古16-380・381）。天平宝字年間の東大寺写経所において、陶碗以外を無蓋食器でとり揃えるのは、やはりその安さのゆえではないか。

このような想像と調和的な考古学的事実を、平城宮・京で出土する須恵器食器に探してみると、焼きがあまり白色を呈し、重ね焼きのため口縁端部が黒く煤けたものや、内外に火嚢が残る一群の須恵器に思いたる。想像される窯詰めの状態から考えて、これらには蓋がつかない。それに多くは底部にヘラキリ痕を残し、大した造作もなく焼かれた粗造の食器に見える。おそらく平城京の近郊で焼かれたものであろう。今回計測した須恵器のなかでは、平城宮SK19189・19190の出土例に、この種のものがある。また時代は少し降るが、西大寺食堂院の井戸SE950から出土した須恵器食器（延暦年間に埋没）¹⁴⁾も同類である（Fig. 38）。そこで天平宝字頃の東大寺写経所が入手していた須恵器も、この手の安物ではなかったかというのが、現時点での筆者の想像である。

もしも東大寺写経所跡が発掘調査によって特定できたならば、そこで出土する土器群を整理分析することで、給食用食器の実態は明らかとなろう。つまり発掘調査は、その答えを得るためのもっとも手短で確実な方法である。しかし現時点では、ほぼ同時代の出土土器を用いて、その食器を近似的に再構成する必要があり、そのためには方法を錬磨せねばならない。何を考えるにしても、いちいち根拠が必要



Fig. 38 西大寺食堂院出土の須恵器食器

である。写経所の須恵器にはなぜ蓋がないかも、一定の結論を下すまでには多くの努力を要することになる。ところが上記のような、単なる思い付きのような想像が有害かつ無用かといえば、決してそうではない。想像とは仮説の根幹をなすものであり、方法とは密接にして不可分である。たかが蓋のある・なしにすぎないが、それには想像をめぐらし、方法を講じるだけの値打ちがあるということである。

補 註

- 1) 鏡形片壺を土師器杯A Iではなく、土師器碗Aに対比する考え方が根強い。かつて西弘海(1978)も、鏡形片壺を土師器碗Aにあてたが、それは天平末年の土器群に対してのみであって、天平宝字から宝亀年間にかけては「土窪坏」を碗Aに対比している。西によれば、宝亀年間の「土鏡形」は「・・・土師器「鏡形片壺」の意であって、先の器名比定の結果に従うならば、天平末年から天平宝字末年の時期には土師器碗Aがこの「鏡形片壺」の名で呼ばれる食器であった。ところが上記の想定が正しいとすると、宝亀年間に土師器碗Aは法量縮小の結果、「窪坏」と呼ばれる器種になったのであり、「土鏡形」の器名は他の食器に求めなければならぬ。」という(西1978 83-84頁)。そしてこのあとに続く検討の結果、「天平宝字4年の「造金堂所解案」にみえる「鏡形片壺」も・・・土師器碗Aとするよりむしろより法量の大きい土師器杯A Iあるいは杯A II(土片壺)を「鏡形片壺」の名で呼んだとするほうが適当であろう。」と結論している(西1978 84頁)。つまり西は、最終的に鏡形片壺を杯A I・A IIにあてたのであった。筆者もまた、鏡形片壺を杯A IまたはA IIにあてる立場を採っており、定着後の碗Aは土窪坏と表記されたと考えている。
- 2) 『群書類従』巻一 神祇部一 1～43頁。
- 3) 森川 実「麦焼と索餅—土器からみた古代の麵食考」『奈文研論叢』第1号、2020年。
- 4) 『平城宮出土墨書土器集成』II(奈良国立文化財研究所、1989年)。
- 5) ここでいう「多法量的な様相」とは、須恵器食器の法量分化がもっとも押し進んだ、いわば極相としての状態を指すのではなく、産地構成の複雑さがもたらした、いわば統制の不全に起因している可能性がある。
- 6) 西 弘海「奈良時代の食器類の器名とその用途」(『奈良国立文化財研究所 研究論集V』、1978年)。
- 7) しかしながら、二部大般若経書写事業の決算報告書案「東大寺奉写大般若経所解案」(大日古16-376～382)では大筒60合となっているので、大筒は駆使以外の全員に支給できたことになる。
- 8) 吉田恵二「古代宮都における食器の系譜」(『國學院大學紀要』第20巻、1981年)。
- 9) ただし本例は、関連史料中に筒が偶々見えていない可能性があり、これをくわえると五器一組となろう。
- 10) こうした形容が適切とは思わないが、例えば月々の告朔解案に見える土器の用口数などは、その月々の固有の事情によってさまざまであるし、器種によっても大きく異なる。このため、つねに流動的な食器の消費状況から、ある食器セットのパターンを見出そうとすることは容易ではない。ところが、予算書案に見えている食器は見込み人員数との対応関係を看取りやすく、予算立案に携わった人物が仮想した静的かつ理念的な食器セットが、勞せず見つかることがある。前節で見たように、西弘海(1978)も二部大般若経・一部大般若経の予算書案を用いつつ、いくつかの食器構成を復元している。
- 11) 西田泰民「土器の器形分類と用途に関する考察」『日本考古学』第14号、2002年、日本考古学協会。
- 12) 森川、前掲註3)文献。
- 13) 奈文研分類にしたがえば、杯A(無台)には蓋がない。このため杯蓋は、自動的に杯B(有台)のそれと考えることになっている。確かに、奈良時代の杯Aには蓋をもたないものが一定量含まれると思うが、それにしても杯Aに見合う「杯B蓋」がまったくないとはいえない。無台食器に蓋があるか・ないかは、土器群ごとに蓋と身との関係について検討を加えたうえで、個別に判定されるべきであって、一律に「杯Aには蓋なし」とみなしてよいかは疑問である。
- 14) 奈良文化財研究所『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』、2007年。

コラム② 食器の支給を願い出た経師たち

宝亀3年11月16日、14名もの経師らが食器の「漏失」を訴え、「依彼数将進」、つまり新しい食器を人数分支給してもらえるようお願い出た。「諸房内飯人事」という書き出しで始まる「高向小祖等連署解」（大日古20-329、以下では「連署解」とする）で食器の支給を訴えたのは、高向小祖を筆頭に鬼室石次、大宅童子、陽胡穂足、丈部濱足、石川宮衣、金月足、山辺千足、秦吉麻呂、壬生廣主、山部針間麻呂、小治田乙成（以上12名は経師）と、古兄人、刑部廣濱（以上2名は装潢）の14名である。この日小治田乙成は不在で、古兄人は休暇中であった（「経師請暇并不參解継文」、大日古20-050）ため自署していないが、彼ら二人の分を含む食器の支給がまとめて申請されたものと推測できる。

彼らはいかなる機縁に基づく集団で、なぜ同時に食器の一新を願い出たのであろうか。その背景を知るためのキーワードが「漏失」である。つまり高向小祖らが訴えた食器の「漏失」とは、いったい何であらうか。まずはこの言葉の意味を明らかにしておこう。

『日本古代人名辞典』にみえる経師ら14名の事績によれば、「……他の十四人と共に食器を漏失」（高向小祖：4-1050）、「高向小祖ら十四人とともに、房内の食器を漏失した」（秦吉麻呂：5-1350）、「……その食器を漏失し」（山辺千足：6-1791）などとあり、漏失は他動詞として用いられている。つまりこの場合の「漏失」は、経師らが「食器を失くした」という意味に近い。現にこの人名辞典のなかには、「……食器を紛失し」（刑部廣濱：2-0444）とした記事もある。このように「漏失」とは、何かを失くすという意味で用いられている。そこではかの用例を探すと、例えば大伴家持が、天平18年正月の宴席で読まれた歌の多くを「漏り失せたり」として、万葉集3926番歌の左注で惜しがっているのは、それらの歌が記録から逸失してしまい、いまは残っていないことを意味している。要するに、高向小祖らは、どういうわけか同時に食器を「失くした」と主張したのである。そこでこの一件を、本稿では「食器漏失事件」と呼ぼう。

事件の背景を明らかにするためには、彼らの身边をまづ調査する必要がある。そこで『日本古代人名辞典』を用いつつ、この14名の周囲を洗い出してみると、彼らは次のような集団であった。

① 彼らのなかには天平年間から写経事業に従事している経師（山辺千足・鬼室石次・山部針間万呂）がおり、天平勝宝・天平宝字年間にはすでに経師であった者（高向小祖・大宅童子・秦吉麻呂・金月足・丈部濱足および小治

田乙成・壬生広主）も多い。

- ② 宝亀3年当時の推定年齢がわかる経師が3人おり、山部針間万呂は49歳、丈部濱足は55歳、鬼室石次は59歳である¹⁾。判明している経師の年齢から考えて、その主体は50歳代で、いずれもベテラン経師であったと思われる。
- ③ 経師12名は、宝亀3年12月から同4年12月までの布施支給リストである「奉写一切経所解（案）」²⁾のなかで、歴名の順番がつねに第3位（高向小祖）から第14位（金月足）までを占めている³⁾。そして12人の中での順序の異同は少ない。要するに彼らは、写経所内で意味のある序列の上位を占める経師たちである。
- ④ 連署解が出された11月16日、小治田乙成（経師）と古兄人（装潢）は不在であったが、高向小祖らの判断によって、二人の食器も一緒に交換されたと推測できる。この二人の支給申請は、高向らによって代行されたわけである。

以上4点から推測すると、彼らは手持ちの食器を偶々紛失した不運な者たちの集合ではなく、年齢と経歴が似通ったベテラン経師たちであったと思われる。おそらくこれまでの写経事業で、長く寝食を共にした仲間意識によって結ばれた集団であったのであろう。そうなると、高向小祖を筆頭とする集団は、自分たちの食器を一新するためにその「漏失」を訴えたようにも見える。食器が本当になくなったのか、その真相は明らかにできないが、この不自然な連署解の背景に、写経所生活が長い経師たちの馴れ合いや狡知をみてとれるのではないか。

またこの文書からは、経師らは写経所から支給された食器（土器）を個人で管理していたこともうかがえる。そして経師一人ひとり、自分の食器に使用上の不具合が生じたとき、写経所に新しい食器の支給を申請していた。現代の学校給食や社員食堂のように、食器は日々共用されているわけではなかったようである。

補 註

- 1) 『日本古代人名辞典』の各事項に拠る。
- 2) 該当する史料は大日古6-486～497、6-523～535、22-195～206、6-544～556、6-557～566である。
- 3) なお、経師への布施支給で順位が第1位なのは念林老人、第2位は荆国足で、この順序も変化がない。連署解の筆頭にみえる高向小祖は、荆国足に次いで3番目に名前が挙ることが多い。このうち、荆国足の推定年齢（宝亀3年当時）は54歳であった。したがって、布施支給リストの歴名順序は、おもに経師らの年功にしたがうものと推測できる。